# 宇宙塵

## アア モダニズムノ コエガスル

加藤克己（かとう　かつみ）
京都府綾部市生まれ。旧制埼玉県立浦和中学校在学中に短歌を作り始め、若山牧水系の歌誌「菁藻」に入会。1956 年、発起人として現代歌人協会を創立、理事を務める（1991 年から 1994 年まで理事長）。1996 年、宮中歌会始召人。この間、日本現代詩歌文学館振興会常任理事。2010 年 5 月 16 日に心不全のため死去。94 歳没。

『宇宙塵』
加藤克己の第三歌集。１９５６年、ユリイカ刊。

■水・・・しっとり感、センチメンタル感
真実は一滴の水のきらめきの掌（たなそこ）の上にのせられてゐる
噴水と石の裂け目と白い花といちめんに冬のふりそそぐのみ
サルビヤの花群（はなむら）ぬらしはふ霧に末女の清き声をあそばす

■モダニズム
・破調（多くはない）
子犬はなべて園生を走り消えゆきぬなべてしづかにしぼむ一日
怒りまなじりをさくなどといふこともなきままに苦しみて生く
救ひは夢に来たりて土を這うわれらにあはき光をそそぐ
小さな四角な箱をひとづき危いかあやふいかなとひとりありたり
犬の舌　叢のもえ　じいんと　むなしきかなや地球の瞬時

・作風・・・モチーフ、雰囲気（着地しなさ）、今でもいける！
鈍色につつまれ沈みゆく底に数限りなき屋根の重なり
ウインドら春の濡れ雪ふりかかり幻のごとアマリリス匂ふ
石の上に背のびして立てば春の空うす藍色の風ながれゆく
ぬくぬくと日だまりにねむりゐし猫が突然まなこ光らせて立つ
なにかしらうしなってしまつた五月です赤旗とポリスの白手袋の交差点です

■物語性（神話・童話）
動詞っぽい
怒りこめコップを庭になげつけるああ少女期の瞬間の飛躍
塗りかさねだんだん影を深く描くやがてしだいに救はれてゆく
群衆を離れ来てまつ暗き地下室のふかき冷たき世界に入いる
手袋の黒き一つをぬぎしときかなしみの光われをつつめり
一枚の手形をのろひ走りゆく車窓に街はけむりのごとし
新しき年のはじめに這い来たりわれに笑みかけるみどり児よああ
カーテンに深き秘密をひそませて苦き一日の夕食を了る
照りかげりあはあは銀座四丁目片目片足のサンドイッチマンに遭ふ

■音（擬音とリズム ）
怒りのさく裂　花と閃く　ひりひりの　真夏の夜の興奮だ
ぼろぼろにづたづたに心すべもなく埋めたりしはよべなりしかな
どしやぶりのぐしやぐしやの雨の底の方で弟の骨がぼうつと白い
ひたひた　ひたひた　ふなばたたたく波のおとここにもかなしみが音たててゐる
七階からみおろす午後の　がらくたの　あのごみどもの　虫けら達の　ああめちやめちやの東京の街
まつたくなんにもなくなり白い灰がふあふあふあふあただよふ世界
青い陽の白い縞目のパピプペポ 麦藁帽が石の上にある
遠く近くどろんどろんとなりひびくねんがらねんじゅう東京の街

■声
しはがれてひくくきびしき声のしてふりかへるとき冬の茫漠
幻聴が幻聴をよびはてしなくさまよひ入りたり枯草の原
ひようひようと墓石の群れを風たたく時になき声のごとく聞ゆる
ソ聯の微笑　中共の誘ひ　アメリカの　ああなににてもあれ怒りも湧かぬ
嘲笑の声があたりに充満し漸やく自信がわきあがり来る
哄はれてゐるに違ひない春の夜を鏡の中で口笛をふく
かなしみの声などではないといひきかせつつ空ゆく風を追ひまわすなり
眼つむればつねに海鳴りがきこえ来て清き勇気を清き勇気を
長雨の蔵窓　ほろべほろべとぞ　底ごもりする神の声あり
穴のなかのぞけばなんにもありはしないただ風のおと神々の笑ひ
枯れ草の打合ふこゑにつまづきて死にいそぐ径かとわれとおどろく

雑草（あらくさ）のスピリット互ひになびきあふあほむけのわれふつとなくなる
底しれぬ穴の奥処（おくが）にわさわさとなにがあつまりゐるのであるか

■全体の感想　作風、時代感、実験性のバランス＋神話性

■今回の一首